

歩きはじめると ことばがこぼれた



小池秀男

(三省堂国語教科書編集委員)

目が合うと、彼はほほえんで小さな声で言った。
「おじいちゃん。」

養護学校小学部一年生のクラス。机や椅子を片隅に寄せた教室には、小さな平均台やマット、ごく低い跳び箱などが一列に並べられ、体育の研究授業が行われていた。

子どもたちが、一人ずつ、その上を歩いたり、台の下をくぐったりして進んで行く。

一年生は六人。チームティーチングなので先生も六人。すんなりとゴールに達することのできる子どもはむしろまれで、途中で立ちつくしてしまいう子ども、コースから外れて逃げ出す子どもがほとんどだ。

そのたびに、声をかけ、手を添えて先生が励ます。そのようにして、ようやく一人がゴールに達すると、先生たちから賞賛の声と拍手が起る。しかし、彼らに抱かれて順番を待っている子どもたちの大半は無関心だ。

色白で黒目がちの大きな目をしたA君は、小柄な子の多

いクラスの中でも、特に小柄だ。コースの最初で、横向きに置かれた平均台の下をくぐるのだが、彼はその下で仰向けになって止まってしまった。そして、たまたまその近くで授業を見学していた私と目が合い、私に向かって呼びかけた、というわけだ。

生まれて初めて「おじいちゃん」と呼ばれ、シヨックでもあり、いささかの感慨もあつて、授業の後で担任の先生から話を聞いた。

「あの子は、まだ歩き始めて二年に満たないのです。入学してきたときは、歩行も安定せず、すぐに座り込み寝そべってしまう子でした。ことばもほとんどありませんでした。でも、この一年、どんどん歩けるようになって、堰を切ったようにことばがあふれ出てきました。あの子の中には、ことばが蓄積され、渦巻いていたのです。」

歩くことと話すこととの、かくも本質的で密接な関係！
そういえば、一般に、ヒトの子どもは生後一年半で安定した歩行を獲得し、ほぼ同じころ、意味を持った発語を始めるという。それは、偶然の一致ではなかったのだ。

その日の研究授業のテーマは「障害物のあるコースをバランズを取って歩く」、小学部の年間指導テーマは「遊びを通じて人と関わる」である。

こいけ ひでお 高校で三〇年あまり勤務した後、知的障害の養護学校に二年勤務。現在、岐阜県立飛騨高山高校勤務。